

Jリーグにおける若年来場者増加 に向けた方策について

コミュニティデザイン学プログラム
216102Y 川口直樹

目次

⚽ 研究背景

⚽ これまでの成果

- ・ Jリーグの来場者数推移（J1リーグを例に）
- ・ Jリーグの若年層来場者割合の推移
- ・ 若者がスタジアムに来ない背景

① 他のスポーツの存在

② DAZNなど配信サービスの存在

③ テレビ放映の減少による露出低下

- ・ 若年来場者増加への取り組み：栃木SCの大学生招待

⚽ 今後の予定

研究背景

Jリーグとは

- 1993年から始まった日本初のプロサッカーリーグ
- 開幕当初から「地域密着・地域貢献」を標榜。「地域社会と一体となったクラブづくり」
- 最近ではバスケットボールのBリーグをはじめ、「地域密着」を掲げるプロスポーツも多いが、Jリーグはその草分け的存在。

研究背景

- Jリーグでは、若年来場者の減少が課題
- 2019年は来場者全体に占める11歳～29歳の割合が22.1%。2002年の50.5%から6割近く減少
- 栃木SCでのインターンシップ時のクラブ側からの課題は「大学生（若年層）がスタジアムに行きたくなる仕掛けを考えよ」
- データとしても現場の声としても、若年来場者減少は大きな問題

研究背景

- 地域とともに歩んできたJリーグは、単なる「プロサッカークラブ」に留まらず、地域のシンボルに。
- 40都道府県にJリーグクラブが存在。生まれ育った地元にも、進学・就職で他の地域に移っても、そこにはJリーグがある。
- 中長期的なファンの減少を食い止めることはもちろん大切。
- Jリーグを通して若年層の地元、また新たな土地への愛着を育む。

来場者数の推移

来場者数推移

- 2019年、合計来場者1100万人、J1リーグの1試合平均来場者2万人という史上最高の記録を残した
- 若年層が減っているからといって、Jリーグ自体の人気の低迷しているわけではない
- 「開幕当初のJリーグに洗礼を受けたファンが、Jリーグとともに齢を重ねている状況」といえるが、逆に言えば根強いファンは多いということ
- プラスで若年層を取り込めれば、全体的な来場者数の底上げに

若年層割合の推移

2000年～2019年におけるJリーグ来場者の平均年齢と若年層割合の推移

年度	平均年齢 (歳)	若年層割合 (%)	年度	平均年齢 (歳)	若年層割合 (%)
2000	記載なし	49.8	2010	38.2	26.1
2001	記載なし	49.6	2011	38.6	25.7
2002	記載なし	50.5	2012	39.0	25.2
2003	記載なし	40.7	2013	39.5	25.0
2004	34.7	34.5	2014	40.4	24.1
2005	35.4	32.2	2015	41.1	22.5
2006	35.9	30.8	2016	41.6	22.1
2007	36.5	29.3	2017	41.7	23.6
2008	37.4	27.0	2018	41.9	23.6
2009	37.3	28.4	2019	42.8	22.1

2004年～2019年のJリーグサマリーより抜粋・筆者加筆
<https://www.jleague.jp/aboutj/spectator-survey/>

若年層割合推移の傾向

- 2009年を除き、着実に高齢化が進行。記録の残る2004年からの15年間で8.1歳上昇
- 若年層割合は比較的増減があるが、割合が最高だった2002年の50.5%から、2019年は22.1%と6割近く減少
- 2000年～2002年の高い割合の背景に日韓W杯の影響？
- 2003年からは減少、W杯の自国開催という大きなチャンスで新規ファンを取り込めなかった

栃木SCの例（2019年）

- 11歳～29歳の合計が19.0%（リーグ平均22.1%）
- 11歳～18歳が9.1%（リーグ平均5.8%）
→J1、J2リーグ40チーム中3位
- 19歳～22歳が2.9%（リーグ平均5.5%）
→同ワースト8位タイ
- 23歳～29歳が7.0%（リーグ平均10.8%）
→同ワースト9位タイ

栃木SCの例（2019年）

- 18歳以下の来場がJリーグトップクラス、親子連れや高校生の集客に成功？
→1位は鹿児島10.1%、2位は琉球9.3%
- 一方、大学生以上の19歳～22歳、23歳～29歳はリーグ平均を大幅に下回る
- 栃木の場合は、若年層の中でも「大学生年代以上」の来場を増やせれば、全体的な底上げに
- 小さい頃にスタジアムに来ていた子どもたちを離さない工夫も

若年層がスタジアムに来ない背景

①他のスポーツの存在

- サッカー以外にも野球を始め多様なプロスポーツ。
- 栃木県ではサッカー、バスケットボール、サイクルロードレース、アイスホッケーのプロチームが存在。
- とくに全国トップレベルの実力と人気を持つ、バスケットボールの宇都宮ブレックス

①他スポーツの存在

一例として...

- スタジアム収容率（平均入場者数÷収容人数）2019年
→栃木SCは33%程度（5148人÷15589人）
→ブレックスは100%超え（4004人÷固定席2900人＋仮設のアリーナ席）
- クラブ公式SNSフォロワー数（栃木SC/ブレックス）2021年11月
- →Twitter（3万/15万）、instagram（1万/4.4万）

①他のスポーツの存在

- 必ずしも競合する必要はないが、サッカー以外にも楽しめるプロスポーツはたくさんあり、実際にバスケットボールが人気

サッカーならではの魅力は？

② DAZNなど配信サービスの存在

- 2017年からJリーグ放映を始めた、スポーツ専門動画配信サービスのDAZN
- 低価格とコンテンツの豊富さが特徴
 - スカパー：Jリーグだけで月3千円、海外サッカーも含めると月6千円
 - DAZN：月2千円以下でJリーグ、海外の主要リーグ、野球、バスケットボールやF1など他のスポーツも

②DAZNなど配信サービスの存在

- スカパーのテレビ中心からパソコン、スマホ、タブレットなどモバイル端末中心の視聴スタイルに変化
- コスパの良さ、モバイル端末中心の視聴でサッカー観戦の手軽さは格段に向上。一方、その手軽さゆえにスタジアムから足が離れた可能性も

スタジアム観戦ならではの魅力はなにか？どう訴求していくか？

③テレビ放映機会減少

- 2022年のカタールワールドカップ出場を懸けたアジア最終予選、日本国外で行われた試合はDAZNによる有料放送のみでテレビ放送はなし。背景に放映権料の高騰。
- サッカーに興味がない人でも自然と目に入る地上波テレビ放映の減少は、新規ファン獲得の上で大きな損失

③テレビ放映機会減少

- とりわけ影響力が大きいワールドカップ本大会の地上波放送廃止を危惧
- 「スポーツは公共財」と考える英国は、関心の高い試合の地上波放送を義務付け

日本の地上波放送はどのような方向に進むか。まずは2022年のカタールワールドカップに注目

若年来場者増加への取り組み

栃木SCの大学生1000人招待

栃木SCの大学生1000人招待

- 2019年6月9日のジェフユナイテッド千葉戦で実施
- チケット無料、シャトルバス無料、宇大からスタジアムへの直通シャトルバス運行など大学生に優しい企画
- 全体で50人程度の参加、宇大生はゼロ...

大学生がスタジアムに行かない理由は、金銭面以外の要素も大きい？

今後の予定

- 文献・資料調査
- 若年層がスタジアムに行かない理由についてアンケート調査
- サッカー、また県内でスポーツに携わる方々にインタビューなど